HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	称名寺聖教『辰菩薩口伝』について ： 中世ダキニ天信仰の一側面
著者	有賀，夏紀; ARIGA，Natsuki
引用	北海学園大学人文論集(66)： 104(五九)-81(八二)
発行日	2019-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

称名寺聖教『辰菩薩口伝』について

――中世ダキニ天信仰の一側面――

有賀夏紀

はじめに

日本中世における稲荷神は、仏教の夜叉である「ダキニ天」（吒枳尼・荼吉尼）と習合し、神祇信仰はもとより密教、陰陽道、修験道、民間信仰にまでひろがる多彩な信仰世界を展開していた。ダキニ天は『大日経疏』に見える大黒天の眷属の夜叉で、人間の心臓を喰らっていたが、大日如来が化現した大黒天に呵責されて以来、死者の心臓だけを食べるようになったという。胎蔵界曼荼羅では外金剛院に人の手足を持つ恐ろしい姿として描かれている。この夜叉神が日本では狐霊や如意宝珠を媒介にして稲荷神と習合し、多くの説話や伝承を生み出した。(1)

論者も以前、南北朝期の寺社縁起集『神道集』を取り上げて、巻三「稲荷大明神事」の本文が仏事法会の場でダキニ天曼荼羅を前に読み上げられる「表白」や「願文」といった儀礼文をもとに構成されたものであることを考察した。(2) その過程で触れたのが、「称名寺聖教（しょうみょうじしょうぎょう）」（金沢文庫保管）(3) に含まれる「頓成悉地法（とんじょうしつぢほう）」という密教修法の次第書である。

「頓成悉地法」はダキニ天を本尊とし、到富や敬愛などの現世利益に速やかに効果を現わすという強力な修法である。しかしながら、狐という畜類の法であるために「外法」と称されることもあり、また民間宗教者がおこなう素朴な行法がある一方で、「輪王灌頂」と呼ばれる天皇の

（五九）

即位法として用いられたり、伊勢外宮の幼巫女（子良）たちの秘儀に取り入れられたりするなど、様々なバリエーションが存在した。[4]

称名寺聖教のダキニ天関連資料群は、はやく櫛田良洪氏が言及し、[5]その後も諸氏によってたびたび触れられてきた。平成十九年には、金沢文庫企画展『陰陽道×密教』が開催され、西岡芳文氏によって約四十点におよぶ資料が体系的に紹介・翻刻されている。[6]これらの資料の発見は国内外から注目をあつめたが、内容の読解はいまだ十分に進められていない。そこで本稿では、称名寺聖教のダキニ天関連資料のうち、『辰菩薩口伝』という聖教を読み解きながら、中世におけるダキニ天信仰の一側面を明かしたいと思う。

一、「安然口決」と円密一致の曼荼羅

称名寺のダキニ天資料には、外題を称名寺二世の釼阿（一二六一～一三三八）が記し、本文を秀範が書写した一群の資料類がある。秀範は大和室生寺や東山白毫寺での活動がうかがえる学僧で、釼阿に頓成悉地法や神祇灌頂を伝授した人物とされる。[7]これらの頓成悉地法関連資料の一部は、釼阿が元亨二年（一三二二）に、称名寺三世の湛睿へ東密西院流の「別相伝」として授けた記録が残されており、ダキニ法が体系的に伝授されていた様相がうかがえる。[8]

本稿で取り上げる『辰菩薩口伝』（三一七函〇四八）は、ダキニ天にまつわる口決を集めたものであり、『辰菩薩口伝上口決』（三一七函〇四九）という聖教と一結になっている。いずれも本文が秀範、外題が釼阿の筆である。『辰菩薩口伝上口決』の奥書には、正和三年（一三一四）二月に秀範が「厳師雑記」から書写した旨が記されており、伝来を明確に示さないダキニ天資料が多いなかで、具体的な年代を知ることができるものである。

『辰菩薩口伝』は、「安然口決」「智証大師口決」のように天台の先徳に仮託して、ダキニ天と眷属たちに教理的説明を付している点が特徴的である。いずれも天台宗の根本経典である『法華経』に関わる内容であり、中世日本天台における「円密一致（天台法華円教と密教との融

合）」の思想に従い、ダキニ天を中心とした『法華経』と密教との合一を志向している。

まずは、「安然口決」とされる部分から確認したい。「安然」は平安前期の天台僧・五大院安然（八四一～九一五頃）であり、顕密を究めたとされる台密の大成者である。『辰菩薩口伝』では安然の口決として、『法華経』「方便品」冒頭の二句について、つぎのように述べる。[9]

方便品「諸仏智恵、甚深无量」ト云二句八字ハ、宣无所不至印ヲ。中台大日如来ナリ。三世十方ノ諸仏ノ智恵ノ性ナレハ、云諸仏智恵ト。非七方便ノ人ノ所証ノ智恵ニハ。円極究竟諸仏所証ノ智恵也。故云甚深ト。是則、法界体性智也。分別スレハ是智ヲ、有五智。一ニハ法界体性智、二ニハ大円鏡智、三ニハ平等性智、四ニハ妙観察智、五ニハ成所作智也。又大日法界体性智、為自受法楽ノ、示現□卅七尊三昧地智ヲ。所謂ル五智四波羅蜜、十六大菩薩、八供養四摂等也。乃至、示現ス无量无辺ノ智ヲ。是則、金剛界会ノ五部ノ如来、九会十八会諸尊ノ智也。（『辰菩薩口伝』）

『法華経』「方便品」の冒頭部分に見える「諸仏智恵、甚深无量」という二句八字には、「无所不至印」という印契を用いる。これは「中台大日如来」である。[10] すべての仏の智恵の本性なので、「諸仏智恵」という。悟りに至る前の七方便人の得た智恵ではなく、円極究竟の仏が得た智恵である。ゆえに「甚深」というのだ、と記している。ここでは『法華経』の本文を「无所不至印」という大日の印契と、「中台大日如来」という仏に配当することで、「法華経・印契・仏」の三者を対応させていることがわかる。この対応関係は、つづけて以下のように展開される。

是円仏方便シテ、化作玉ヘリ藍婆羅刹女ノ身ト。（『辰菩薩口伝』）

ここで「円仏」＝「中台大日如来」は方便して、『法華経』を守護する十羅刹女のひとりである「藍婆羅刹女」へと変じるという。これによって先の「法華経・印契・仏」という対応関係は、「法華経・印契・仏・十羅刹女」へと拡大するのである。

（六一）

十羅刹女は、『法華経』「陀羅尼品」で説かれる鬼女たちで、鬼子母神や眷属とともに『法華経』の受持者を擁護するとされる。十羅刹女を交えた四者の対応関係は、胎蔵界の中央にある中台八葉院に坐す「八葉九尊」にそって開示されていく。

従リ其智恵門ト云至于人記品ノ終ニ、宣フ大威徳生印ヲ。宝幢如来ナリ。信解品ニハ威徳特尊ト云、化城品ニハ威徳世尊ト等云、其証文也。是宝幢仏方便シテ、化作玉ヘリ毘藍婆羅刹女ノ身ト也。従提婆品ニ至于涌出品四品ハ、宣フ文殊師利印ヲ。是菩薩ノ方便シテ、示現ノ曲歯羅刹女身ト也。宝塔品宣金剛不壊印ヲ、花開如来ナリ。是仏方便シテ、示現花歯羅刹女ノ身ト也。寿量品ニハ宣蓮花蔵印ヲ、阿弥陀如来ナリ。是ノ仏方便シテ、示現多髪羅刹女ノ身ト也。分別品乃至不軽品ニハ、宣弥勒迅疾持ノ印ヲ也。是菩薩、化作无厭足羅刹女身ト也。神力品乃至妙音四品ニハ、宣フ万徳荘厳ノ印ヲ。天鼓音如来也。是仏、化作フ持瓔珞羅刹女ノ身ト也。凡、自リ方便品ニ至于厳王品ニ廿六品ハ正宗段也。是、宣大日八印ヲ、大日内証ノ八印也。一切如来智印ナリ。乃至吒枳尼天ノ印等、三部三重ノ諸尊、外部ノ天等ノ大日外現ノ諸印也。（『辰菩薩口伝』）（六二）

先の「方便品」二句につづく経文から「人記品」に至るまでは「大威徳生印」と「宝幢如来」が配当され、この宝幢仏は方便して「毘藍婆羅刹女」へと化作する。また「提婆品」から「湧出品」に至る四品には、「文殊師利印」と「文殊菩薩」が配当され、「曲歯羅刹女」へと示現するというように、胎蔵界の九尊はそれぞれ十羅刹女に姿を変えながら、『法華経』二十八品のうち、最初の「序品」と最後の「普賢菩薩勧発品」を除いた二十六品のいわゆる「正宗段」に結びつけられていく。

この対応関係をまとめれば、つぎのようになる。[11]

（仏菩薩）	（羅刹女）	（法華経）	（印契）
大日	藍婆	方便品二句	无所不至印
宝幢	毘藍婆	方便品～人記品	大威徳印
文殊	曲歯	提婆品～涌出品	文殊師利印（法住）

花開　花歯　宝塔品　金剛不壊印
阿弥陀　多髪　寿量品　蓮花蔵印
弥勒　无厭足　分別品～不軽品　迅速持印
天鼓音　持瓔珞　神力品～妙音品　万徳荘厳印

ここでは七尊しか語られていないが、このあとの「私云」の異説では、右ではあげられていなかった普賢菩薩と観音菩薩が補足され、胎蔵界の九尊が揃うこととなる。なお本文横には中台八葉院の図が描かれており、それぞれの花弁に九尊と十羅刹女、および名数が記されている。[12]

そして十番目の羅刹女として、いよいよ辰菩薩＝「吒枳尼天」が登場する。

其最後吒枳尼天方便シテ、示現奪一切衆生精気羅刹女ノ身ト也。是十羅刹女八葉ノ九尊ハ、及吒枳尼尊、示現色身也。是羅刹女ハ、擁護受持読経解説書写妙法蓮華経ノ法師ヲ也〈是安然和尚／口決記也〉。

（『辰菩薩口伝』）

諸尊の最後にダキニ天が方便して、「奪一切衆生精気羅刹女」へと化すという。注目したいのが十羅刹女と八葉の九尊はダキニ天に及んで「色身」を示現するという波線部の記述である。ここでいう色身とは、知覚できない真理そのものの仏のあり方（法身）に対して、具体的な形を具えた仏の姿のことを指す。このあとに見える付説では、

私云、此八葉九尊ハ即大日如来ノ化現也。最後ノ化身、吒枳尼天是也。此吒枳尼天之示現、十名奪一切衆生精気羅刹女身也。（『辰菩薩口伝』）

と、「大日如来＝八葉九尊＝ダキニ天＝羅刹女」という関係が端的に示されるが、本文波線部の「及吒枳尼尊、示現色身」という叙述には、さらにダキニ天が大日如来の化現である諸仏を生じさせるという意味も含まれている。つまり、ダキニ天によって諸尊が個別化・顕在化するという。これはのちの本文に、「一切衆生ノ身中ニ有大日八印。諸尊ト顕ス事ハ吒枳尼王ノ所為也。是ヲ以テ吒枳

（六二）

尼王ハ三世諸仏ノ母也」と、衆生の身の内にある「大日八印」が諸尊として顕われるのはダキニ天の所為であり、そのためダキニ天を「三世諸仏の母」と称するのだ、と記されていることとも呼応しよう。

密教ではこの世のすべてが大日如来と同一であると考え、行者はみずからを仏と一体化するために、手に印契を結んで（身密）、口に真言を誦し（口密）、心に本尊を観じる（意密）「三密行」をおこなう。『辰菩薩口伝』では、すべての諸尊は大日如来の化現であるという密教の基本的な考え方をもとに、「胎蔵界の九尊・法華経・十羅刹女・印契」という四者を対応させ、仏の悟りそのものである秘密の教え「密教」に対し、相手に合わせて顕わに説いた「顕教」とされる『法華経』を胎蔵界曼荼羅と合一化し、密教的解釈を加えている。こうした『法華経』と曼荼羅との和合の中核にダキニ天を据えることで、ダキニ天を『法華経』の守護者として位置づけているのである。

二、『法華経』と密教

日本天台の大きな特色として、「天台教学」と「密教」との融合・一致を標榜する「円密一致」の性質があげられる。最澄が唐から持ち帰った密教は、入唐僧の円仁・円珍によって充実がはかられ、安然によって大成される。台密の学僧たちは根本経典である『法華経』を含めた「密教」の理論を創出し、『法華経』の密教的解釈をおこなったのである。[13]

こうした『法華経』と密教との融合を説くものに、智証大師円珍（八一四～八九一）の撰とされる『講演法華儀』『法華曼荼羅諸品配釈』があげられる。両書が円珍の真作か否かは議論が分かれるところであるが、『講演法華儀』については、すくなくとも十二世紀半ばには成立していたとされている。[14] たとえば十四世紀に天台記家の光宗が著した『渓嵐拾葉集』第二十八では、真言による龍女成仏を説くなかで、「智証大師云〈講演法華義〉」として『講演法華儀』を円珍の著作として掲げており、中世の天台僧は本書を円珍の手になるものと考えていたこ

とが知られる。[15]

さて、この『講演法華儀』には、つぎのように記されている。

今先分二三段一次分二八葉一。初分二三段一者、初序品為二序説分一。従二方便品一下至二妙荘厳品一。総二十六品経為二正説分一。後普賢品為二流通分一。初序分有レ二。謂通序別序。云云。次分二於八葉一者、是即分二此経正説之文一。（中略）今分二此文一為レ二。一謂中胎二謂八葉。言二中胎一者、如二経諸仏智恵甚深無量一ト云カ。即是中胎仏智也。何故名曰二諸仏智恵一者、白浄月輪処二八葉中一、普為二一切諸仏智性一。故云二諸仏智恵一也。（『講演法華儀』[16]）

ここでは序品を序説分、普賢品を流通分として除き、方便品から妙荘厳品までの二十六品を正説分として中台八葉に配するという。そして中胎（中台）の大日如来を「諸仏智恵、甚深無量」の二句に配当し、一切諸仏の智性であるがゆえに「諸仏智恵」というと説いている。[17]かかる内容は、前出の『辰菩薩口伝』と大きく重なっているのがわかるであろう。

また『講演法華儀』では、二十六品を『辰菩薩口伝』とおなじように八葉の九尊に対応させ、それぞれに数を付している。その配当は、「中胎・大日・方便品二句（一）」「東方・宝幢・方便品～人記品（二）」「東南方・普賢・法師品（三）」「南方・華開敷・宝塔品（四）」「西南方・文殊・提婆～湧出（五）」「西方・阿弥陀・寿量品（六）」「西北方・弥勒・分別功徳品等（七）」「北方・天鼓音・神力品等（八）」「東北方・観世音・普門品等（九）」となっており、こちらも『辰菩薩口伝』の本文や蓮華図とほぼ重なっている。[18]

さらに天台座主・良助親王（一二六八～一三一八）の撰と擬される『法華輝臨遊風談』巻七「十羅刹本地事」には、十羅刹女が曼荼羅に配当されている例が認められる。

法花秘法ノ之藍婆ハ妙法蓮花ノ八葉中台東葉ノ阿閦仏ナリ。毘藍婆ハ南葉ノ宝勝仏ナリ。曲歯ハ西葉ノ阿

（六五）

弥陀仏ナリ。花歯ハ北方ノ不空成就仏也。余ハ四隅ノ普賢文殊観音弥勒也。又中台ハ大日如来ナリ。第十奪一切衆生ハ荼枳尼ナリ。法花経ノ宇賀神也。已上。

（『法華輝臨遊風談』）[19]

ここでは羅刹女たちが、それぞれ金剛界の五仏と胎蔵界の四菩薩を本地とする旨が述べられている。注目したいのが、傍線部の「第十奪一切衆生」が「荼枳尼」だと明言されている点である。ここで『法華経』と曼荼羅、十羅刹女、そしてダキニ天とが結びついた所説を確認することができるのである。[20]

安然もまた両部曼荼羅を用いて『法華経』を解説した『要記』の選者と伝えられるが、この『要記』も安然に仮託されたものだという。[21] こうした事実からは、十三、四世紀には『法華経』と曼荼羅の一致・融合をめぐる所説が、安然や円珍の口説という形をとって流布していたことが知られよう。そして十四世紀はじめに、秀範によって称名寺にもたらされた『辰菩薩口伝』もまた、このような仮託書をとりまく思想的背景のなかで生まれたものだったと推察されるのである。

（六六）

三、「智証大師口決」と八分肉団

『辰菩薩口伝』では「安然口決」につづき、「智証大師口決」として円珍に仮託された口説が展開される。

夫一切衆生ノ身中、五蔵ノ中ノ羅符蔵、云フ八分肉団ト。此肉団ヲ奪テ取テ食用スル羅刹女鬼、名奪一切精気ト也。衆生ノ精気ハ、有羅符蔵八分肉団ノ内。其八分肉団、即自性清浄覚悟ノ蓮花也。

（『辰菩薩口伝』）

一切衆生の身のうちにある「羅符蔵」を「八分肉団」という。「八分肉団」は心臓のことであり、この肉団を奪って喰らう羅刹女を「奪一切精気」と称す。先の「安然口決」では、この奪一切衆生精気羅刹女こそダキニ天であった。ここでは衆生の八分肉団は「自性清浄覚悟」の「蓮花」だと説く。

密教では凡夫の肉団を閉じた蓮華になぞらえ、印契を結んで真言を誦し、本尊を観じて仏と一体化する境地に至れば、蓮華が開いて八葉の九尊をあらわすと考えられた。先の「安然口決」で詳述された胎蔵界曼荼羅の中台八葉院が、ここに至って衆生の「八分肉団＝心臓」へと生々しく変貌をとげるのである。

そしてこのあとに中台八葉のそれぞれの「葉」（花弁）の名称が列挙されていく。

其葉々ニ无量无辺ノ数アリ。根本ハ八葉也。東葉ヲハ名相葉ト。南葉ヲハ名性葉ト。西葉ヲハ名体葉ト。北葉ヲハ名力葉ト。東南葉ヲハ名作葉ト。西南葉ヲハ名因葉ト。西北葉ヲハ名縁葉ト。東北葉ヲハ名果葉ト。中台ヲハ名報台ト。始ノ相葉ヲ為本ト、後ノ報台ヲ為末ト。九尊如来、化中道実相ト也。故云究竟ト也。周遍法界ノ妙理、无有コト高下ト。故云等ト也。四仏四菩薩ハ端座八葉ノ上ニ、大日如来ハ結跏趺坐中台ニ給フ。其ノ无量无辺花葉ノ上ニ、仏菩薩・明王等端座給。

（『辰菩薩口伝』）

胎蔵界の四仏四菩薩は「相・性・体・力・作・因・縁・果」と名づけられた八枚の花弁に端座し、中央の「報台」に大日如来が結跏趺坐しているという。そして最初の「相」と最後の「報」という本末が行き着くところは、結局、おなじ「実相」に他ならないことを「究竟」と呼んでいる。これは『法華経』の方便品に説かれた十如是という、すべての存在（諸法）のありのままの姿（実相）には十種類あるとする教理に基づいたものである。

『辰菩薩口伝』では、後半部でこの中台八葉院に十如是と仏名を配した「法全（はっせん）闍梨図」と称する蓮華図を掲載する。法全は円仁・円珍らに密教を伝えた青龍寺の学侶で、蓮華図の中央（「報」）には金剛界大日としての釈迦と、胎蔵界大日としての多宝如来の名が見えることから、本図が法華曼荼羅をもとにしたものであることが知られる。法華曼荼羅は「法華経法」の本尊とされ、『法華経』を密教的に解釈し、金胎両部の合行をあらわした曼荼羅であった。

そしてまた先に掲げた『講演法華儀』とおなじく円珍撰と伝えるものに、『法華経両界和合義』という典籍があ

（六七）

る。本書も撰述の真偽には考証の余地があるが[22]、『法華経』二十八品を両部曼荼羅の諸尊に配釈し、『法華経』の本門を金剛界に、迹門を胎蔵界にあてて論じている。ここでも『辰菩薩口伝』と同様に、八葉にそれぞれ「相・性・体・力・作・因・縁・果」をあて、中台を「報」とし、それらを総称して「本末究竟」としている。なお『講演法華儀』にもこれとおなじ説が見えており、十如是を中台八葉院に配当する所説が中世の仮託書において広く享受されていたことがうかがえるのである。『辰菩薩口伝』ではその八葉を「八分肉団」に結びつけ、胎蔵界の九尊をはじめとする数多の仏菩薩や明王が端座するもの（＝曼荼羅）として示し、それが衆生の体内に蔵されているというのである。

こうした「八分肉団」観を明確に示したあとに、『辰菩薩口伝』では再び「大師口決云」という書き出しで、あらためて八分肉団とダキニ天との関係について語りはじめる。

吒枳尼ノ印相ト云ル、右拳押腰ヲ、仰ケテ左掌ヲ、以舌ヲ一舐ル血ヲ一勢ニ作也。左ル理也。（『辰菩薩口伝』）

（六八）

ここで「吒枳尼ノ印相」なるものが登場する。それは右手を腰に押し当て、左の掌を仰いで、舌で血を舐めるような所作であるという[23]。この奇妙な印相は、『大日経』第十四に「荼吉尼印」として見えるものである。そこには「申三昧手（引用者注・左手）、以覆面門、爾賀嚩触之」とあって、左手で口を覆って舌で触るという所作だけが記されているのだが、これが安然の『胎蔵界大法対受記』では、つぎのように解釈されている。

第百九十四荼吉尼印

海大徳説、荼吉尼定掌（引用者注・左手）爾賀嚩触レ之者、先申二定掌一横掩二面門一〈口也〉出レ舌触掌中一。如下食二人血一之勢上。慧拳（同注・右手）按レ腰。爾賀嚩者舌也。玄大徳説同。権僧正大和上説。慧珍両和上説同〈但慧和上説。荼吉尼者叉津弥〉別記亦同〈但云。作二舐レ血之勢一〉。

（『胎蔵界大法対受記』）[24]

『大日経』では所作の記述だけであったのが、傍線部では左手（定掌）で口を覆って舌で掌中に触れる所作を人血を食する様子と表現しており、衆生の心臓を喰らうダキニ天の性質を踏まえた意味づけがなされている。これは『辰菩薩口伝』の「以舌ヲ舐ル血ヲ勢ニ作也」という記述に通じ、この「人の血を舐める」ダキニ天の性質が、『辰菩薩口伝』ではまさに重要になってくるのである。

理者九法界ノ衆生ノ身具スル仏性也。其仏性者法身ノ妙理也。修徳ノ法身ハ白狐王ナリ。以テ智恵ノ舌ヲ、舐无明ノ血ヲ尽シテ、真如ノ理体、自性清浄覚悟ノ蓮花ト顕ス。其中台ノ八葉ニ端座給フ。大日八葉ノ印、九尊即チ是自性法身ト云也ト者ハ此義也。故ニ一切衆生ノ身中ニ、有大日八印。諸尊ト顕ス事ハ吒枳尼王ノ所為也。是ヲ以テ、吒枳尼王ハ三世ノ諸仏ノ母也。所顕ノ大日八印諸尊ナリ。以テ方便ノ力ヲ、能生ノ母ハ示同ス吒枳尼王ノ形ニ。化作藍婆等ノ九人ノ羅刹女ノ身ト給。故ニ云十羅刹女ト也。（『辰菩薩口伝』）

ここでは「理（胎蔵界の真理）」を、すべての衆生が身に具える「仏性（本来具えている仏の要素）」だと述べている。そこに前述の八分肉団（心臓）が八葉蓮華であるという発想が重なることで、「理＝仏性」は「八分肉団＝八葉蓮華」に内包されているという連想が成り立つ。つまり衆生の体内にある心臓は、仏性を蔵した八葉蓮華そのものなのである。

そして大日如来が姿を変えた「白狐王（ダキニ天）」が智恵の舌を使って、衆生の肉団を覆っている「无明ノ血（煩悩）」を舐め尽くすと、その中から本来の清らかな蓮花（悟り）が顕われるという。六ヶ月前に人の死を知り、心臓を喰らうというダキニ天の性質は、『辰菩薩口伝』において、それがじつは衆生に悟りを会得させるための「方便ノ力」なのだと解釈されるのである。

ダキニ天の化現とされた羅刹女の行為もまた、これと同様に意味づけられていく。

奪一切衆生精気ト者、奪取テ无明妄想精気ヲ、食入スル如来蔵ノ腹中ニ也。妙覚海也。胎蔵ヲ云花蔵（十六九）

海ト、金剛ヲ云蜜厳海ト也。吒枳尼王ノ腹中ニ湛(タヽヘ)満テ、□(25)字智水ヲ、令一切衆生ヲシテ即身成仏セ事、無シトセル過ハ吒枳尼王ニ。（『辰菩薩口伝』）

ダキニ天が化現した十羅刹女のひとり「奪一切衆生精気」は、衆生の「无明妄想精気（煩悩にまみれた精気）」を食すことによって、自らの「如来蔵（煩悩に覆い隠されている清らかな悟り）」の腹中へ入れる。これは妙覚（悟り）の海であり、胎蔵界の海を「花蔵海」といい、金剛界の海を「蜜厳海」という。そこには煩悩の垢を洗い流す「智水」が湛えられていて、腹中に取り込んだ衆生の「无明妄想精気」を濯いで「即身成仏」させる（即身に悟りを会得させる）というのである。ダキニ天も十羅刹女も、本来は人を害する夜叉や鬼女であったのが、衆生の心臓を八葉蓮華とみなす密教的身体観の介入によって、じつはそうした行動もすべて衆生を成仏させるための方便だったのだと、ここでその真意が明かされるわけである。

さらに本文では、胸中の「智水」へと話題が移っていく。

（七〇）

至テ胸ノ間ニ水輪也。其水輪ノ上ニ、有リ八葉ノ大蓮花王一。其所住ハ胸之間也。化現シテ無量蓮花ヲ、散シ在(ヲワ)𑖭字智水海中ニ。是ヲ云花蔵海ト也。入証ノ二乗不退ノ菩薩、不知見之ヲ。故ニ云蜜厳海ト也。初住已上等覚已還ノ菩薩、分ニ知見之ヲ。妙覚仏究竟シテ、知見之。亦究竟シテ、住其蓮花王ノ上ニ給。故云妙覚海ト也。（『辰菩薩口伝』）

衆生の胸の間に水輪があり、その上に「八葉ノ大蓮花王」なる大蓮華が存する。それが沢山の蓮華を化現して、鑁(ばん)字（金剛界大日の種字）の智水で満たされた海中に散在させる。この海を「花蔵海」（胎蔵界）という。また、悟りから遠い二乗不退の菩薩は知見できない海なので「蜜厳海」（金剛界）という。初住から等覚（菩薩五十二位のうち十一位から五十一位まで）の菩薩はそれぞれの分際に従ってこれを知見し、悟りに達した妙覚の菩薩だけがこれを完全に見ることができる。ゆえにこの海を

「妙覚海」という。先の「肉団（心臓）＝八葉蓮華」という認識と併せて、衆生の胸の内に智水を湛えた胎金両部の悟りの海があるという、衆生の肉体と悟りとを結びつける密教的思惟が、ここに展開されるのである。

『辰菩薩口伝』では、この言説がふたたび『法華経』へと往還し、密教と『法華経』を融合させる円密一致の志向を見ることができる。そして本書においてその融合はダキニ天によって象徴され、成就されるものなのである。

四、「真言法華の肝心」としてのダキニ天

八葉蓮華（肉団心）を中心とした密教説は、ふたたび釈迦が説いたとされる『法華経』へと収斂されていく。

尺迦如来於霊山二処三会一ニ、顕ニ説ク此事ヲ一。故ヘニ云妙法蓮花経一ト。大日如来於テ法界宮ノ中一ニ、秘殗（カクス）是事ヲ一。故云蓮花胎蔵一ト。尺迦所説妙法蓮花経ヲ擁護スル人ヲ、名奪一切衆生精気一ト。大日所説ノ三部ノ秘法ヲ守護スル人ヲ、名吒枳尼王等一。十二大威徳天、无数金剛天等、皆此尊ノ反作也。（『辰菩薩口伝』）

釈迦は二処三会で「顕ニ」この心蓮華にまつわる教理を説いた。それが『妙法蓮華経』である。対して大日如来はこの真理を秘匿したので、「蓮花胎蔵」という。釈迦の『法華経』を擁護する者は「奪一切衆生精気」と名づけられ、大日如来の三部の秘法（『大日経』『金剛頂経』『蘇悉地経』）を守護する者は「吒枳尼王」と名づけられた。つまり、奪一切衆生精気は顕教の守護者とされ、ダキニ天は密教の守護者とされているわけだが、本書で再三説かれてきたように、両者がじつは一体であることを考えれば、ここでは「顕」と「密」との一体を説いていることになる。大日如来の化現であるダキニ天はまさに顕密を兼ね備えた尊格として、この『法華経』をめぐる曼荼羅世界を統合する存在となるのである。

このあとには、ダキニ天の眷属である天女子・赤女子・黒女子を顕教と密教とに配釈し、おなじく眷属の五大王子と八大王子を胎金に当てて解釈するなど、ダキニ天と眷属によって顕密と胎金の不二があらわされていく。多

（七一）

くの眷属を従えるダキニ天のありさまは、諸尊の中央に結跏趺坐する大日如来の尊容を想起させるものであり、ダキニ天がしばしば曼荼羅と関連して語られることも納得されよう。[26]

こうした「口決」が具陳されたあとに、『辰菩薩口伝』では、最終段でつぎのように述べている。

本末究竟如是ハ九如是総体、々々トイハ平等大会一乗ナリ。々々々々々々々者、奪一切衆生精気女ナリ。々々々々々々々々ト者吒天也。吒天ト者、如意輪ノ化現也リ。仍テ観音法花ハ眼目ノ異名ナリ。如意輪ヲハ名持宝ト。当尊ヲハ号如意末菩薩。本末雖殊ト御名一也リ。（『辰菩薩口伝』）

傍線部で「吒天（ダキニ天）」は「如意輪」の化現だといい、如意輪観音と『法華経』とは「眼目ノ異名」、つまり「眼」と「目」は呼び方こそ異なるものの同じものであるように、如意輪観音と『法華経』も同一であると示されている。ここで新たに「ダキニ天＝観音＝法華経」

という関係性が説かれているわけである。

このダキニ天と如意輪観音との同体説は、比叡山の学匠光宗（一二六二～一三五〇）編纂の『渓嵐拾葉集』にも見える。本書は顕密禅戒の口伝や秘事、作法、説話などを集積した大部の仏教資料集で、中世天台宗の知が集積された百科全書の様相を呈すものである。

相伝云、天照太神天下ヲ給テ後、天ノ岩戸ヘ籠給フト云者、辰狐ノ形ニテ籠ヲ給也。諸畜獣ノ中ニ辰狐者自レ身放二光明一。神故ニ其ノ形ヲ現シ給ヘル也ト云云。尋云、何故ソ辰狐必ス放二光明一耶。答、辰狐ト者如意輪観音ノ化現也。以二如意宝珠一為二其体一ト。故名二辰陀摩尼王一ト也。（『渓嵐拾葉集』）[27]

天照太神が天岩戸へ籠もった時、その姿は「辰狐」（ダキニ天と習合した狐霊）であったという。ここで詳しく触れる余地はないが、これは天皇の即位灌頂とも関係する秘説である。[28] 注目したいのが辰狐は如意輪観音の化身であり、如意宝珠がその本体だという傍線部の記述であ

る。そのため如意輪観音は梵名を「辰陀摩尼」といい、これは如意宝珠のことだと明かされる。『辰菩薩口伝』は、内題が「如意宝珠菩薩口決」とされていて、そこにはダキニ天が「如意輪観音＝如意宝珠」の化身とされるこうした本地説が反映されている。

この「観音＝法華」説は、『渓嵐拾葉集』第三十一ではつぎのように述べられている。

以二観音一法花教主ト習方如何。示云。凡普門品ノ始末ヲ見ルニ、観音称名徳ヲ挙テ法花ノ名言ヲ不レ置事ハ、是法花与二観音一一体ナル事ヲ為レ顕也。故釈云、法名二達摩駄都一、人名二観自在王一ト云。観音者、人法不二ノ体ナルカ故、以二観音一為二法花教主一也云云。尋云。観音品観音ニ六観音ノ中ニハ何乎。答。三重之習有レ之。一ニハ正観音也。二ニハ如意輪也。三ニハ千手也。此三種ノ観音ノ習事アリ。（『渓嵐拾葉集』[29]）

観音を法華の教主とするのはなぜかという問いに対し、『法華経』「普門品」の冒頭と文末では観音の名を唱える功徳が語られていて、法華の名言には触れられていない、これは法華と観音とが一体であることを顕しているからだと答えている。そしてそれは六観音のうちの正（聖）観音、如意輪観音、千手観音のことだという。また「観世音」の三文字は「空・仮・中」の三諦に対応しており、「法華＝実相＝三諦」であるから、法華と観音との一体を思うべきだとも説いている。[30] こうした「法華＝観音」説の広がりを背景に、『辰菩薩口伝』では、以下のように断じるのである。

深秘ハ還浅略ヘ故ニ観音法花ノ深奥ハ以当尊一可入眼一者也。入ル当尊三摩地ニ。即チ真言法花ノ肝心ナリ。（『辰菩薩口伝』）

観音法華の「深奥」は、ダキニ天をもって知るべきものである。ダキニ天が「三摩地」（心を専注して至る悟りの境地）に入ることが、すなわち真言（密教）と法華（天台法華教学）の「肝心」である。こう言明することで、本書はダキニ天を密教と天台法華教学との融合を具現す

（七三）

（七四）

る深秘の存在として語るのである。ダキニ天をめぐる本書の位置が、明確かつ端的に示された一文といえよう。

このように、本書は『法華経』と密教の一致をはかった中世日本天台の教説のなかで、円珍や安然の撰述とされる仮託書の世界と隣接しながら、大日如来の化現であるダキニ天の秘説として形成されたものだったと考えられる。そしてそれはダキニ天信仰の変容と享受の具体相を示すものであると同時に、多彩な要素を包括して拡大する中世の宗教的解釈学の産物でもあった。

五、ダキニ天をめぐる天台系所説

さて、『辰菩薩口伝』ではダキニ天を「真言法花ノ肝心」と讃えたあと、巻末に以下のような一文を添える。

即位水丁(灌頂)、独リ在三井者即チ是等ノ大事也。可秘々々。（『辰菩薩口伝』）

ダキニ天を本尊とし、「輪王灌頂」と呼ばれる天皇の即位法があったことはすでに述べたが、ここではそれが「独リ」「三井」にだけ伝わるという。「三井」とは円珍が中興した三井寺（園城寺）のことであるが、三井寺をめぐるダキニ天信仰は『渓嵐拾葉集』第三十九「吒枳尼天秘決」に掲載された二つの記事が参考になろう。

一、山門有二此天法一事　示云、古老伝云、此吒天法者、東寺ト三井派トニ委細ニ相伝シテ山門ニハ無レ之。其故ハ山家大師御相承有リケレトモ相輪樘下ニ此法ト禅法トハ被レ埋了。仍テ天台流ニハ不二賞翫一申伝タリ。然而黒谷流ニ代代相伝来テ秘蔵スル事有テ、山家大師ト弘法大師ト蘖階念誦秘決トテ一巻秘書有レ之。（『渓嵐拾葉集』）[31]

一、三井流ニ有二此法一事　尋云、三井流有二此法一乎如何。示云、於二此天一者三井流殊ニ委細也。故智証大師、於二大唐一奉レ値二良譜和尚一相二伝之一ヲ給リ。所謂悉地成就決七帖是也。最極秘事也云云。又云。三井流ニハ金剛童子秘法有レ之。今吒天一体ト習也。

甚深甚深。（『渓嵐拾葉集』[32]）

先の記事は、古老の伝によれば「吒天法」は東寺と三井寺には委細に相伝したが、山門には伝わらなかった。それは最澄が一度はこの法を相伝しながらも、相輪樘（そうりんとう）の下に禅法とともに埋めてしまったからである。しかし山門でも光宗の属する黒谷流にだけは代々相伝し、秘蔵されていたという。

つぎの記事には、三井寺にはダキニ天にかかわる修法が殊に委細に伝わり、これは智証大師が大唐の「良譜和尚」（越州開元寺の良譜和尚か）から相伝したものだとする。いわゆる『悉地成就決』七帖がそれであり、このことは「最極秘事」である、と述べている。[33] さらに金剛童子の秘法も三井ではダキニ天と一体として習うという。

こうして三井寺の「最極秘事」とされたダキニ天は、円珍請来と伝える三井寺の鎮守神・新羅明神や、新羅明神と同体視される尊星王（そんじょうおう）とも一体化し、寺門をめぐる言説のなかでさまざまな変貌をとげるのである。その一例として、『渓嵐拾葉集』第一〇五「仏像安置事」に見える記事を掲げたい。

一、三井新羅明神ヲ習二吒天一事　智証大師御相承義云、本地ヲハ名二尊星王一。垂迹ヲハ名二新羅明神一。即是吒天也。故新羅垂迹使者ニハ以二辰狐一為二使者一也云云。（『渓嵐拾葉集』[34]）

「尊星王」は神格化された北極星の本地であり、「妙見（みょうけん）菩薩（ぼさつ）」「北辰菩薩（ほくしんぼさつ）」とも呼ばれる。災厄を除滅して国土を護り、人の寿福や生死を司る尊格で、尊星王を本尊とする「尊星王法」は、三井寺の最大秘法とされた。尊星王法も円珍請来と伝える修法であり、この尊星王が新羅明神と同体であって、新羅明神はダキニ天のことであると『渓嵐拾葉集』には記されているわけである。[35]

こうしたダキニ天をめぐる所説は、『辰菩薩口伝』編纂の周囲にも及んでいたらしい。たとえば『辰菩薩口伝』という書名は、ダキニ天の異名である「辰狐王菩薩」に由来するものだが、あえて「辰菩薩」としているのは、尊星王の異名「北辰菩薩」を踏まえてのものと推測され

（七五）

る。これには『辰菩薩口伝』と一結の聖教、『辰菩薩口伝上口決』の所説が大きな手がかりとなろう。

辰王口決

口ニ云ク、当尊ハ是レ真言法花ノ惣体也リ。徳ヲ陰陽ニ分ケテ居ヲトシム南北一故ニ台ノ陰リ起リ自リ北天一、陽ノ金ハ出タリ自南天一。法花ノ現益又如レ然ノ。北海ノ龍女トシテ南方ニ唱覚ヲ一。是レ豈ニ自然ナラン乎。定テ有二深由一歟。只是レ辰狐北辰ノ深秘、万生根源ノ陰陽ト理ト智ト所レ令レ然也。北辰トシテハ分レテ七星ト衆生ニ施シ命根ヲ一、辰狐トシテハ現シテ南北（傍注「斗」）ト告玉フ世ノ吉凶ヲ一。仍テ寿福双ヘテ依二此尊ニ持テリ。尤モ可レ奉二崇重一尊也。　（『辰菩薩口伝上口決』）

冒頭の傍線部では『辰菩薩口伝』で説かれたように、ダキニ天が「真言法花ノ惣体」であることが示され、その徳を「陰陽」と「台（胎）金」に配当している。それから辰狐が北辰の深秘であって万物根源の陰陽や理智（胎金）を司る存在であり、北辰（北極星）としては七星に分かれて衆生に命根を施し、辰狐としては南北（斗）に現れて世の吉凶を告げると述べる。『辰菩薩口伝』の周辺にも、こうしたダキニ天と北辰菩薩をめぐる所伝が伝わっていたと考えられるのである。

なお、ダキニ天と藤原鎌足の説話を伝える即位法が東寺方即位法と呼ばれるのに対し、天台方の即位法は周の穆王説話に基づくものである。[36] この天台方即位法には『法華経』四要品の偈文が登場し、『辰菩薩口伝』の口決もそれに関わると考えられるのだが、これについてはまた別に論じたい。

このように、『辰菩薩口伝』は台密の所説を主体に、円密一致の思想を骨子として編まれたものであった。本書を称名寺へ伝えた秀範は、大和室生寺や東山白毫寺での活動が確認される東密の学僧であるが、正和四年（一三一五）に天台記家の義源から『山家要略記』を受けた可能性も指摘されており、山王関係の秘事・口伝類と接していた確率も高いという。[37]

また嘉元二年（一三〇四）には釵阿が室生寺において園城寺系を中心に付法されていた智証大師感得の金色不

動尊の印信血脈（『忍空授鈷阿状』）を相伝するなど[38]、秀範や鈷阿は台密を受容できる環境にあったものと推察される。正和三年（一三一四）ごろの写と考えられる『辰菩薩口伝』の所説も、そうした学問環境のなかで輯録されたものであったかと想像されるのである。

おわりに

以上、称名寺に伝わる『辰菩薩口伝』を読み解きながら、鎌倉末期から南北朝期にかけて展開したダキニ天信仰の一変相を確認してきた。『辰菩薩口伝』で具陳されるダキニ天と『法華経』、そして曼荼羅との融合は、天台法華教学と密教との一致を標榜した円密一致思想のなかで生成された所説だったのである。

多くの眷属を従えるダキニ天の姿は、諸尊を配する曼荼羅を想起させるものであり、実際、『法華経』密教化の過程において、両部曼荼羅の大日如来と重ね合わされることとなった。人間の内臓を喰らうという恐ろしい性質も、即身に成仏することを目的とした密教的身体観と結びつき、煩悩の血で隠された心蓮華を舐めて、あるいは腹中の智水で灌いで、本来の清浄な仏性を顕現させ、菩提に至らしめるための行為という理由づけがなされ、大日如来の化現であるダキニ天の方便として解釈されたのである。

また、本書が『講演法華儀』などの仮託書類ときわめて近い内容をもち、かつ円珍・安然の口決を記すという形式をとることも注意される。巻末の付説における即位灌頂への言及や、本書と一結の『辰菩薩口伝上口決』でダキニ天が北辰菩薩と一体とされることなども、今後検討を要しよう。称名寺聖教の輪王灌頂資料も含めて、『法華経』に関わる即位法についてはまた別稿を用意したい。

称名寺にダキニ天関連資料をもたらした秀範は、室生寺や京洛寺院などを遊学し、また天台記家の義源による伝授の可能性が指摘されるなど、台密の秘事口伝と接することができる環境にあったことが推測される。『辰菩薩口伝』も、こうした諸宗兼学が遂行される中世の学問的状況のなかで生成されたものだったのであろう。本書はダキニ天をめぐる言説や儀礼と密接に交錯しながら、

（七七）

円密一致を掲げる日本天台教学の形成過程が創出した具体的な所産のひとつであると同時に、ダキニ天信仰の新たな側面をうかがい知ることができる資料なのである。

注

(1) 稲荷神と習合したダキニ天に関する論攷は多く、ここでは代表的なもののみを掲げる。近藤喜博『古代信仰研究』(角川書店、一九六三)、同『稲荷信仰』(塙書房、一九七八)、五来重「稲荷信仰と仏教」(『稲荷信仰の研究』山陽新聞社、一九八五)、阿部泰郎「宝珠と王権」(『岩波講座東洋思想』一六、岩波書店、一九八九)、同「道祖神と愛法神」(『湯屋の皇后』名古屋大学出版会、一九九八)、田中貴子『外法と愛法の中世』(平凡社ライブラリー、二〇〇六。初刊は砂子屋書房、一九九三)、山本ひろ子「辰狐のイコノグラフィー」(『変成譜』春秋社、二〇〇〇)、松本郁代『中世王権と即位灌頂』(森話社、二〇〇五)、林温「吒枳尼天曼荼羅について」(『仏教芸術』二一七、仏教芸術学会、一九九四・一一)、白原由起子「「伏見稲荷曼荼羅」考」(『MUSEUM』五六〇、東京国立博物館、一九九九・六)など。また、西岡芳文「ダキニ法の成立と展開」(『朱』五七、伏見稲荷大社、二〇一四・二)には、近年の称名寺聖教の発見を含むダキニ法関連の言説がまとめて紹介されている。

(2) 有賀夏紀「『神道集』巻三「稲荷大明神事」における表現をめぐって」(『人文』一三、学習院大学人文科学研究所、二〇一五・三)。

(3) 武蔵国六浦庄(現横浜市金沢区)の金沢称名寺は、鎌倉幕府の執権・金沢北条氏の菩提寺として創建された真言律宗寺院で、現在も一万三千点をこえる中世の貴重な典籍や文書類が伝わっている。おもに鎌倉末期から南北朝期にかけて形成された「称名寺聖教」「金沢文庫文書」と称される資料群は、平成二十八年に一括して国宝に指定された。

(4) ほかにもたとえば中世文学では『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』などの軍記物語や、『古今著聞集』のような説話集、『神道集』などの寺社縁起集にダキニ天の姿を見出すことができる。また白狐に騎乗する天女形のダキニ天とそれを取り巻く眷属を描いた曼荼羅も確認されており、その尊容がダキニ法の次第と一致するなど、ダキニ天をめぐる言説は広く日本文化史上に波及している。

(5) 櫛田良洪「神道思想の受容」(『真言密教成立過程の研究』山喜房仏書林、一九六四)。

（6）『陰陽道×密教』（神奈川県立金沢文庫、二〇〇七）。図録出版後に発見された資料については、西岡芳文「金沢称名寺における頓成悉地法」（『金沢文庫研究』三二〇、神奈川県立金沢文庫、二〇〇八・三）に翻刻が掲載されている。西岡氏の論攷によると「それ以後も発見が続いている」ため、近いうちにまとまった形での紹介を企図されているという。

（7）秀範をめぐっては、久保田収「両部神道の成立と発展」（『中世神道の研究』臨川書店、一九五九）、櫛田良洪「神道思想の受容」「関東に於ける東密の展開」（『真言密教成立過程の研究』前掲注5）、納富常天「称名寺の基礎的研究」（『金沢文庫資料の研究』法蔵館、一九八二）、牧野和夫「中世聖徳太子伝と説話」（『説話の講座3　説話の場』勉誠社、一九九三）、同「太子伝と中世日本紀」（『解釈と鑑賞』六四・三、至文堂、一九九九・三）、同「「本地物」の四周」（『仏教文学』二七、仏教文学会、二〇〇三・三）、同「談義所遁蔵聖教について」（『実践国文学』八三、実践女子大学、二〇一三・三）、伊藤聡「称名寺の中世神道聖教」（『中世天照大神信仰の研究』法蔵館、二〇一一）など参照。

（8）西岡芳文「金沢称名寺における頓成悉地法」（前掲注6）。ただし、その伝授のなかに『辰菩薩口伝』は含まれていない。

（9）以下『辰菩薩口伝』の本文は、金沢文庫の影印をもとに、『陰陽道×密教』（前掲注6）を適宜参照して作成している。本文の傍線、句読点、括弧等は私に付し、用字は原則、通行の字体に改めた。

（10）「中台大日如来」とは、胎蔵界曼荼羅の中央に位置する中台八葉院の大日如来のことをいう。そのつぎの「五智」の話題から「九会十八会」に至るまでの後半部分の記述は、金剛界の曼荼羅について述べたものであり、「中台大日如来」（胎蔵界）の記述と混在させることで、胎金不二（胎蔵界と金剛界は一体である）という密教の真理を表現したものと推察される。

（11）永正九年（一五一二）の尊舜『法華経鷲林拾葉鈔』第二十四に、十羅刹女の本地がつぎのように記されている。①藍婆＝阿閦または文殊、②毘藍婆＝華開敷または薬王、③曲歯＝阿弥陀または薬上、④華歯＝不変成就仏、⑤黒歯＝大日如来または弥勒菩薩、⑥多髪＝普賢または地蔵、⑦無厭＝無能勝菩薩、⑧持瓔珞＝無尽意または観音、⑨皐諦＝文殊または普賢菩薩、⑩奪一切＝自在菩薩（『日本大蔵経』三〇、七〇七頁。名前の表記は底本のとおり）。

（12）『辰菩薩口伝』には、八葉院に九尊と十羅刹女、名数が

（七九）

配釈された八葉蓮華の図が掲げられており、そこでの配当は、①大日・藍婆・一名、②宝幢・毘藍婆・二名、③普賢・曲歯・三名、④花開・花歯・四名、⑤文殊・黒歯・五名、⑥阿弥陀・多髪・六名、⑦観音・无厭足・七名、⑧天鼓・持瓔珞・八名、⑨弥勒・皐諦・九名とされていて、本文とはやや異なる。配当にも諸説あったことが想像される。

(13) 大久保良峻「天台宗」「真言宗〔密教〕」（『新・八宗綱要』法蔵館、二〇〇一）、水上文義「法華曼荼羅と円密一致思想の「曼荼羅」」（『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八）、ルチア・ドルチェ「台密における法華経解釈と儀礼」（『天台学報』特別号、天台学会、二〇〇七・一〇）、同「法華経と密教」（『法華経と日蓮』春秋社、二〇一四）など参照。

(14) 『仏書解説大辞典』の「講演法華儀」項目（田島徳音）、長部和雄「法華の密教化に関する私見」（『密教文化』二六、密教文化研究会、一九五四・三）、水上文義「安然以前に『法華三昧経』を「引用」した文献の検討」（『台密思想形成の研究』前掲注13）参照。また、水上文義氏は前掲注13論文において、こうした「円密一致思想の曼荼羅とは、そうした通例の図像としての（引用者注・『法華経観智儀軌』などに拠った）法華曼荼羅ではなく、日本天台で独自に考えられた「曼荼羅」であり、主に中世日本天台の偽疑書に記されるもの」と指摘している。

(15) ただし『渓嵐拾葉集』に引かれている文言は、現行の『講演法華儀』には見出せない。

(16) 『講演法華略儀』巻上（『大日本仏教全書』二七、九二二頁）。

(17) 水上文義氏は『講演法華儀』について「円密一致を説く文献の大部分は、通常はいかに『法華経』の思想とその註釈とが、密教思想と齟齬をきたさずに整合するものであるかということに重点が置かれるのに対し、本書の場合は密教思想が前提で、そこに『法華経』をどのように展開するかが鍵となっていよう」と評している。水上文義「安然以前に『法華三昧経』を「引用」した文献の検討」（前掲注14）。

(18) 『辰菩薩口伝』の八葉図については、前掲注12参照。なお『法華曼荼羅諸品配釈』も、「大日・序品」「宝幢・方便品」「華開・信解品」「阿弥陀・寿量品」「天鼓音・神力品」「普賢・薬草品」「文殊・提婆品」「観音・普門品」「弥勒・分別功徳品」と記し、完全ではないものの、『辰菩薩口伝』と重なる部分が多い。

(19) 『法華輝臨遊風談』（『大日本仏教全書』一四、四七七頁）。

本書について水上文義氏は良助仮託としている。水上文義「『蓮華三昧経』の基礎的考察」「良助親王の神道説をめぐって」（『台密思想形成の研究』前掲注13）。

(20) 『法華輝臨遊風談』に見える諸尊の配当は、『蓮華三昧経』と呼ばれる日本撰述経典の配当に十羅刹女とダキニ天を加えた形である。『蓮華三昧経』は『講演法華儀』などと類似する内容で、仏書や神祇書などさまざまな文献に使用された。『蓮華三昧経』の現存する本文は、中世日本で作成されたものと考えられている。水上文義「『蓮華三昧経』の基礎的考察」（前掲注19）参照。

(21) 『仏書解説大辞典』「要記」項目を参照。本項目を担当した田島徳音氏は、本書の巻末に「天永元年」（一一一〇）の年記が見えるため、おそらくそのころの著作かとしている。

(22) 『仏書解説大辞典』「法華経両界和合義」項目（渡辺最昌）、長部和雄「法華の密教化に関する私見」（前掲注14）参照。

(23) 山本ひろ子「摩多羅神の姿態変換」（『異神』平凡社、一九九八）では、この印相を用いた「延納六月法」というダキニ天の修法について考証されている。

(24) 『胎蔵界大法対受記』第四（大正蔵七五、八六頁a）。

(25) 当該文字は梵字だが、底本が破損していて判読不能である。『陰陽道×密教』の翻刻では「pa字」としている。

(26) たとえば『神道集』巻三「稲荷大明神事」においても、ダキニ天に関する叙述は「内外八供」「大三法羯」「嬉鬘歌舞」「鈎索鎖鈴」など曼荼羅にまつわる語が用いられている。『神道集』も尊容を図像的に描写していることや、眷属を列挙していることなどを含めて、ダキニ天の曼荼羅を連想させる記述がある。拙稿「『神道集』巻三「稲荷大明神事」における表現をめぐって」（前掲注2）参照。

(27) 『渓嵐拾葉集』第六（大正蔵七六、五二〇頁c）。ほかに第一〇九（大正蔵七六、八六七頁b）にも同様の記事が見える。

(28) 山本ひろ子「辰狐のイコノグラフィー」（前掲注1）参照。

(29) 『渓嵐拾葉集』第三十一（大正蔵七六、六〇八頁c～六〇九頁a）。

(30) 「頓成悉地法」などのダキニ法では、ダキニ天の本地は往々にして文殊菩薩とされる。『渓嵐拾葉集』第三十九ではダキニ天と文殊菩薩の同体説を前提に、文殊菩薩を「法花教主」とし、ダキニ天を『法華経』の本門に、「奪精一切衆生精気神」を迹門に配当している。そしてダキニ天と十

（八一）

羅刹女の同体説を展開することで、ダキニ天と『法華経』とが一体であると主張している。

(31)『渓嵐拾葉集』第三十九（大正蔵七六、六三二頁ａ）。

(32)『渓嵐拾葉集』第三十九（大正蔵七六、六三三頁ａ）。

(33)「智証大師請来目録」によると、円珍は良諝科点の『妙法蓮華経』七巻を請来している。『悉地成就決』七帖とは、あるいはこの『法華経』が変容した姿か。

(34)『渓嵐拾葉集』第一〇五（大正蔵七六、八五三頁ａ）。

(35) 山本ひろ子「異神と王権」（『異神』前掲注23）において、新羅明神と尊星王との同体説について論じられている。

(36) 天台方の即位儀礼は、伊藤正義「慈童説話考」（『国語国文』五五五、京都大学文学部、一九八〇・一一）、阿部泰郎「慈童説話の形成」（『国語国文』六〇〇・六〇一、京都大学文学部、一九八四・八、九）など参照。

(37) 牧野和夫「太子伝と中世日本紀」（前掲注7）、同「「本地物」の四周」（前掲注7）、同「談義所逓蔵聖教について」（前掲注7）、大久保良順「天台の神本仏迹説資料」（『神道大系　月報』天台神道・下、神道大系編纂会、一九九三・五）など参照。大久保氏によると、徳治三年（一三〇八）に『恵檀両流諸箇秘決』という台密の口決を類聚した「秀範」がいる。この「秀範」が称名寺へダキニ天関連資料をもたらした秀範と同一であるとしたら台密にも精通した人物だったと考えられるが、これについては検討を要する。また、田中貴子氏は『渓嵐拾葉集』の編者である光宗が、正和元年（一三一二）ごろに義源から山王関係の伝授を受けていたことを指摘する（田中貴子「光宗と『渓嵐拾葉集』」『渓嵐拾葉集』の世界』名古屋大学出版会、二〇〇三）。仮に秀範が義源から付法を受けていたとすれば、秀範と光宗は口説伝授の場や時期がほぼ重なっていたこととなる。

(38) 櫛田良洪『中世真言密教成立過程の研究』（前掲注5）、納富常天「室生寺と称名寺釵阿」（『金沢文庫資料の研究』前掲注7）。